

残像の帝国をめぐる攻防——ポーランド問題とドモフスキ——

宮崎 悠（北海道大学スラブ研究センター／日本学術振興会特別研究員）

はじめに

ロシア領ポーランド出身の世紀転換期の政治家・外交家として知られるロマン・ドモフスキ（Roman Dmowski, 1864-1939）が、「ポーランド問題」に対して導き出した解とその限界を、彼の「全ポーランド主義」と「新しい帝国」論から明らかにする。その際、彼の新しい国家構想が、いかにしてポーランド＝リトアニア共和国の記憶を克服しようとしたのが問題となる。

*18世紀の分割以前のポーランド＝リトアニア共和国が、東部領域に暮らす人々にとっては「帝国」であったということ、またポーランド・シュラフタ（貴族層）が分割後に「帝国」としての意識を遡及的に強めたことに着目。

・・・かつてのポーランド自身の帝国性とどのように向き合うかが、分割期のナショナリズムのあり方や、活動方針の違いとなって現れた（ピアスト理念⇄ヤギェウォ理念）。

歴史的背景の概観

<ポーランド問題の起源>

・ポーランドとリトアニアの合同

1370年 ピアスト家が断絶

1385年 クレヴオの合同

1386年 ヤギェウォ朝の成立

ポーランド王ヤドヴィガとリトアニア大公ヤギェウォの結婚により、リトアニアの洗礼、ポーランド王国とリトアニア大公国との合同（編入？）が誓約される

1569年 ル布林合同

*分割以前のポーランド＝リトアニア共和国の領域は、最盛期には、現在のポーランド、リトアニアだけでなく、ベラルーシ、ウクライナ、ロシアにまで及んでいた。この共和国には、「ポーランド人」と称するスラヴ民族ばかりでなく、リトアニア人、ウクライナ人、ベラルーシ人、ユダヤ人、タタール人などが居住し、多重的なエスニック・言語・宗教・文化集団から構成され、その中で複数の支配領域に分かれており、（とりわけ東方では）絶えず膨張と流動を繰り返す辺境を有するという点からすれば、ある種の「帝国」であった。[Nowak, 2004]

ここでいう「帝国」とは、その内部がエスノ・ナショナルな相違をもとに複数の領域（法域、行政域）に分割され、それらの間に階層的な秩序が形成されている、多民族的な政治共同体をさす。均質的で非階層的な主権国家である国民国家とは異なり、複合的で階層的。しかも、絶えず領土を膨張しようとする「拡散性」を持つために、その辺境（境界地域）の範囲は常に曖昧で流動的。[小山 2001年]

←ポーランド分割（1772年、1793年、1795年）；ロシア、プロイセン、オーストリアにより分割・併合され、ポーランド＝リトアニア共和国は消滅。

・・・「ポーランド問題」の起源

<「ポーランド問題」の特徴>

ヨーロッパ近代史という大きな歴史潮流からみるなら、18世紀から20世紀初頭にかけてのポーランドの消滅から国家的独立へと至る過程は、帝国から国民国家へ、多重民族帝国や複合国家の分裂・崩壊から国民国家の台頭へ、という全般的な潮流の一部をなしていた。

*ただし、ポーランドの事例が特異であったのは、それ自体かつて「帝国」であったものが、ロシア、ドイツ、オーストリアという三つの帝国によって分割された点。それだけに、この「問題」は、ポーランド政治にとどまらず、分割と併合を行った三帝国の政治や、その領内にある他の民族集団、ヨーロッパの国際政治に関わる多面的・複合的な問題群として表面化した。

・ポーランド＝リトアニア共和国の分割から再建までの経緯

- 1) ポーランド＝リトアニア共和国は、域内の諸民族集団の独立志向・競合によって解体・分裂したのではなく、まずロシア、オーストリア、ドイツという近隣の三帝国という外的な圧力によって、域内の諸集団の有り様とは関係なく分割された。
- 2) 分割支配されていたおよそ 120 年の間（特に 19 世紀後半）に、各分割領内において個々にまたは国境を越える形で複数の民族集団が形成され、それが諸支配帝国内において協力ないし競合・対立し、諸帝国内における分裂と紛争を引き起こす火種となった。
- 3) そして第一次大戦とロシア革命の結果、ポーランドを支配していた三つの帝国がほぼ同時期に敗北・崩壊・分裂し、その中からポーランドやリトアニアなど複数の国民国家が再編・統合・再生した。

*隣接する三帝国によって分割され共和国が消滅した後も、ポーランドの言語・宗教・文化上の帝國的構成は維持されていた。ドモフスキが政治活動を行った 19 世紀後半以降（ポーランドにおいてナショナリズムが伸張し始めた時期）には、外部から三分割され、内部においては多様に亀裂の入った内外二重の帝國的構成が、彼らの運動と意識の両面に影響を及ぼしたと考えられる。ドモフスキの国民統合論やドイツ脅威論の思想的形成過程もまた、その例外ではなかった。

<蜂起の時代>

1814-15 年 ウィーン会議において、独自の憲法と軍を備えたポーランド王国（いわゆる会議王国 Kongresówka）が成立、国家再建の第一段階と目された。

／しかし、実際には、ロシア側によって侵害され、憲法は有名無実化する。

←ポーランド・シュラフタは、自分達の「自由」と権利への侵害に対する抗議として、

1830-31 年 十一月蜂起を起こす。蜂起は、大軍を投入したロシアに対してポーランド軍が敗北を続け、翌年のワルシャワの降伏をもって終了。

蜂起に参加したシュラフタが大量に国外へ亡命（大亡命）、特にパリへ亡命したリトアニア地方出身の大貴族のアダム・チャルトリスキを中心に、オテル・ランベール派という在外のポーランド独立運動の拠点形成される。

～一月蜂起（1863-64 年）にいたる一連の蜂起を支える思想を多く生み出す。

<大亡命世代のシュラフタが生んだ思想の特徴>

「東向きの（元）帝国意識」

- ・ ロシア皇帝による侵害に対抗して「自由」と特権を擁護する戦いの正当化、直前の蜂起の記憶および歴史的に東方領域（いわゆる Kresy）を巡って戦ってきたことを背景とする反ロシア感情。
 - ・ 旧ポーランド＝リトアニア共和国の領土のうち、ポーランド会議王国に入らずに、直接ロシア領とされた東方領域を回復する形（つまり 1772 年国境）でのポーランド復活を目指す。
 - ・ 十一月蜂起において兵員不足だったことを反省し、その供給源として農民をポーランド国民の範囲に含めることとする。また、東部の国境領域のマルチエスニックな社会構成をふまえ、そこに居住するポーランド人以外の人々も、国民に含めることとする。
- + 軍事的敗北という痛手を抱えながら、亡命先ではロシアとの戦いにおける英雄的な自分たちの姿を美化。自分達の地所であった大規模な土地のある東部領域に対する望郷の念から、1772 年国境の回復を悲願として固定。ポーランドの現状から離れた、誇大な再建案を自由に議論するようになる。
- ・ ・ ・ ロシア支配下のポーランド国内では、家庭など非公式の場において、武装蜂起の記憶や反ロシア的な思想が文学作品や親族の語りによって維持。
- ～一月蜂起にいたる一連の蜂起の思想的支柱となる。

（会議王国の国内では）一月蜂起世代（1820-30 年代生まれ）は、政治活動から撤退。

有機的労働、三面忠誠主義へ

←1890 年代「屈服せざる者たち」（1850 年代・生まれ）の始動；合法的な経済・文化活動への撤退に反発。ドモフスキは、ロシア政府の抑圧的な支配に対しても、またそれに反発せずに政治活動から撤退してしまった一月蜂起世代に対しても反発を抱き、非合

法の政治活動もいとわぬ世代（20代後半から30代位）の一人。

=====

ロマン・ドモフスキ (Roman Dmowski, 1864-1939)

ロシア領ポーランド出身の政治家、外交家。世紀転換期から第一次大戦を経て戦間期にいたる時代に、ロシア領ポーランド、ガリツィア、英仏において、ポーランド国民民主党の思想的牽引役としてその活動を指導。

- ・全ポーランド主義 一見成功したナショナリズム？
- ・ドイツ脅威論 第二次大戦におけるドイツの侵攻を予見？
- ・新しい国家像 「ポーランド＝リトアニア共和国」という枠から脱却して、東部領域を縮小し、西方のドイツ領へ進出するという案 ～「建国の父」

／・反ユダヤ主義 同時代から現代に至るまで、激しい非難を浴びる要因となる。

2006年11月10日、ワルシャワにドモフスキの銅像が設置され除幕式が行われたが、「ポーランド独立記念日」にあたる翌11日に、像にペンキがかけられる。

——同時代から現代に至るまで、ドモフスキの思想と行動に対しては毀誉褒貶が分かれている。

研究史

1930年代（ヴワディスワフ・ポブク・マリノフスキ）生前のドモフスキに対して同時代的な批判。ドモフスキが独立を放棄し、ロシア政府へ追従したと解釈。

1939年 ドモフスキ死去～協働者の回想録

第二次大戦後（共産党時代） 独立運動の時期が歴史研究のテーマとして避けられる傾向にあったため、主な研究の場が国外へ（特に1970-80年代の英、80年代以降は米でも）。

1980年代 ポーランド国内において民主化の機運が高まると、ドモフスキがポーランド独立時代の象徴として再評価される。

1990年代 それまで検閲を避け公表されていなかった研究が出版され始める。また、ポーランド国内の資料閲覧が容易に。

2000年以降 80年代までの空白と、90年代までの過剰な評価の揺れを修正する研究へ。

<これまでの研究の問題点>（特にポーランド国内でなされた研究）

- ①「親ロシア派」としての表面的な解釈、「反ユダヤ主義者」としての批判
／その半面にある社会ダーウィニズムやドイツ脅威論については？
- ②「二重の帝国性」のうち、ポーランド自身が持っていた帝国性の看過
・・・ドモフスキが何を批判していたのか、彼が壊そうとした「共和国」という枠について、あまり言及されてこなかった。
←（批判）現在のウクライナなど旧ロシア帝国西部地帯の研究者[Magocsi, 1996]
一 国史の枠組を乗り越える地域的な歴史研究の試み[小山 2005年]

=====

第I部 全ポーランド主義

国民統合論の形成期（1890-1900年代）

第一の支柱「全ポーランド主義」

『我々のパトリオティズム』（1893年に執筆されたドモフスキ最初の政治論文）より

「ポーランド人それぞれの政治的行為は、どこで遂行され誰に対して向けられたものであるかに関わらず、国民全体の利害を視野に入れていなくてはならない」、これが、「国民への政治は地域（分割領）ごとの利害を出発点としてはならない、という第一の原則」。第二の原則は、「真のパトリオティズムは、ある一階級の利害ではなく、国民全体の利害を視野に入れていなくてはならない。」 [Dmowski, *Nasz*. s.3.]

三支配帝国によって引かれた分割線（国境線）と、ポーランド国民内部の階級の格差とを取り除き、ポーランドの統合を目指す。

- ・・・ロシア領・プロイセン領・オーストリア領に三分割されたポーランドの地理的統合とともに、マグナートやシュラフタといったポーランドの貴族階級と農民や労働者の間にある断絶を超克し、階級間統合を目標とする国民統合・創出の思想。一月蜂起がシュ

ラフタのみの反乱にとどまり、農民層の支持を全く得られなかった反省に基づく。

・1890年代に「全ポーランド主義」が、それまでの思想潮流を統合するパトリオティズムの主張として受け止められた理由

理由1) 民族的統合を訴える点で、「三面忠誠主義」に反対する挑戦的概念であったため。

*「三面忠誠主義」とは、独立することを諦めてロシア、ドイツ、オーストリアの三帝国に忠誠を誓い、それぞれの帝国内で経済的・文化的にポーランド人の地位を高めようとする考え方。一月蜂起が壊滅的に鎮圧された後の1870-80年代、敗北主義的な空気が漂う中で勢いを得た。

←(批判) ポスト一月蜂起世代であるドモフスキ(1864年生まれ)は、一月蜂起の失敗で痛手を受け政治活動から撤退した人々を「服従派」と呼び、経済的・文化的活動に専念することに反発。政治的な抵抗を行うという主張を表明。

◎ さらに、一月蜂起の担い手となったシュラフタ層が、歴史的に見れば、共和国時代には自分達の「自由」と諸権利の擁護に専心して王の権力を弱め、結果として共和国の弱体化と近隣諸国による干渉と分割を招いたこと、ナポレオン戦争後には厭戦的にポーランド会議王国としてロシア支配下に入ることを受け入れながら、実際には憲法が遵守されないなどツァーリによる侵害が起こるとそれに反発して十一月蜂起(1830-31年)を起こし失敗したこと、そうした自己の「自由」と諸権利の擁護を基準としたシュラフタの行動の歴史的経緯全体に対する批判が背景にある。

Cf. シュラフタによる改革の試み[白木 2005]

理由2) この主張が、ポーランド国家を構成するポーランド民族の中に、シュラフタだけでなく農民や労働者も含めたため。14世紀以降、ポーランド民族を構成するのは、シュラフタと呼ばれる貴族階級の人々に限られてきた(シュラフタの共和国)。そのため、従来「ポーランド国民」の中には、農民等他の階級の人々が含まれずにいた。これに対し、ドモフスキの主張する全階級の統合は、ポーランド国民の基盤を大きく変化させるものであった。

第二の思想的支柱；社会ダーウィニズムの影響を受けた国民観

——外的環境によって生み出された国民観。これは「全ポーランド主義」の重要な論拠となっている。

(ドモフスキ)「ポーランドのシュラフタは巨人であったが、しかし、ライバルがいなかったがために繁栄したドードー一種の鳥と同類の巨人である。」[Dmowski, *Mysli* s. 48.]

・・・ポーランドのシュラフタも、突然の人間の乱入と共に消滅したドードー鳥同様、新しい状況に適応できず消滅していくもの、という認識。さらに、旧共和国の広大な東方領域の回復を当然とするかつての「帝国」意識を、批判的に「巨人」と表現している。

——これは、それまでシュラフタのみで構成されていた「ポーランド国民」が、自然界における自然淘汰に引照される国際社会の現実のもとでは、他の諸民族との競合において生き残ることができずに国を分割されてしまった、という見解。

～「農民や労働者も含む」という国民観の転換へ向かう。国民となる要件は、

・(エスニックな意味で)ポーランド人であることに加え、

・ポーランド国民という共同体への献身や、犠牲をいとわない事

とされた。特に、後者が欠ける場合は、前者を満たしていても「半ポーランド人」(1902年11月)とされる。

「ポーランド社会で生活するために必要な程度でのみ、ポーランド語やポーランドの生活習慣を受け入れ——しかしポーランドにおいて生活を享受するために各人が担うべき責任は負わず、国民全体の自己保存や将来的独立と生存、十全な発育環境への志向に参加しない人々に、[我々は]対処しなければならない。…ポーランド国民は、自らの文化と伝統を保持し、独自の魂と、固有の文化を具えた、生き生きとした人民の組織的つながりである。それは、ある範囲で共通の必要と利害を持つものであって、個人的な献身につながる厳密な責任を課しており、集団として必要な事柄のために働き、共通の利害のために戦うこと

第三の思想的支柱；「共和国」という枠組みの破壊

十一月蜂起・大亡命世代以降、ポーランド独立運動が最終目標としてきたのは基本的には 1772 年国境での国家再建。その際、東部国境領域には、多くのポーランド人以外の集団が含まれる。

・・・(オテル・ランベール派など) 領域内の非ポーランド人も、国民として組み入れる案。
Cf. (ドモフスキ) 非ポーランド人の多い東部領域は縮小。将来のポーランド領土の範囲をポーランドに「土着の rdzenny」地域に限定。東方領域のウクライナ人や、ユダヤ人といった諸集団を排除しようとした。

*ただし、現実には、ポーランド人となるべき人々とりわけ農民は、いずれの国民としてのアイデンティティも意識していないという事実を、ドモフスキは認識していた。彼が理想とする、共通の意思で結ばれる共同体と、現実世界の「まだ啓蒙されていない」農民(潜在的ポーランド人)との間には、大きなギャップがあった。

潜在的ポーランド人という概念を用いることによって、国民としての意識が実際に広く普及する前段階においても、ポーランド国民の存在を確保するための案。

—かつての広大な東方の領土と政治的影響力を失った後にも、亡命シュラフタから十一月蜂起世代にいたるまで、残像のようについでにまわった「帝国」としての自意識を克服し、そうすることで近代的な国民国家へと脱皮しようとする試み。

第 II 部 ドイツ脅威論とポーランド問題

誰を敵とするのか

1890 年代後半から 1900 年代初頭；ドモフスキの著述において、ロシアとドイツという二大国にどう対応するか、という点が盛んに論じられる。

「ドイツと共に」或いは「ロシアと共に」という以外に答えは無く、これら以外に第三の選択肢は無い。なぜなら、ポーランドにとって最も正当な答えのひとつは、「ドイツにもロシアにも頼らずに、むしろ独力で両者に対抗する」というものだが、これは、しかし、ある場合において、前者あるいは後者に連合を申し入れる必要性を排除しないからである。」

・・・ドイツあるいはロシアと共生することを二者択一的に検討。
事実上、どちらかの国家機構に取り込まれた上で、ポーランドとして一定の自治あるいは自立を維持しようという考え。
△どちらにも取り込まれることなく、ポーランドが自力で独立国家となる可能性；
その際には「連合」という形でどちらか一国の力を借りなければ(従属しなければ)、国家として存続することは困難。

～代表作『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』(1908 年)において、理性的な認識と、それでもなお独立を目指したいという願望との「ジレンマ」への対処に折り合いを付けるため、彼独自の外交方針を示す。

<ロシアの相対化>

1893 年の『我々のパトリオティズム』；ロシアの中のポーランド

ロシア人はポーランド社会の内に入り込み、ロシア化を押し進める敵という認識。生物の肉体とアナロジーされたポーランド国民を傷つけ抑圧する、いまそこにある野蛮な暴力(強大で、蜂起を鎮圧するのに十分な軍事力を備え、ポーランド内に駐留している)。

+社会的ダーウィニズム的観点から、国民同士の生存競争という構図でポーランドの置かれた状況を捉え、ロシア人の暴力性を恐れつつも、文化面や経済面ではポーランド人の方が上だと考え、ロシア人を蔑視。

↓ 視野の拡大

Cf. 1903 年時点；ドイツとロシアに挟まれたポーランド

単なる嫌悪や蔑視だけでなく、政治領域としてのロシア帝国(ロシア領ポーランドを含む)の現状を見極めようとする視点が明確化。

<ドモフスキのドイツ観>

ドイツに対しては、文化的優位を認めており、ポーランドの国民性を同化しうる手強い国民として畏怖し警戒しつつ、敬意を払っていた。

- ・・・政治活動領域としてのロシア領ポーランドをドモフスキは重視。ポーランド人を同化しえないロシア人の支配下の方が、優れたドイツ人の支配下よりも、国民としての自立を獲得しやすいと考えたため。

～ロシアという防御壁の中で、ドイツの経済的・文化的・軍事的拡大に備える。

「ドイツの危険は明らかに、我々が概して思っているよりも大きく、それに直面した不安ゆえにロシアの抱擁に飛び込みたいと思う人々の多くが考えているよりも、なお一層大きい。長年にわたって、ドイツの側からの〔ドイツ人の〕声を我々は聞いているが、それはポーランドの国民性の成長を嘆く声であり、我々ポーランド人の数が増えていくのを嘆き、我々の経済的文化的成果を嘆き、我々の政治的・国民運動の発展を嘆く声である。」

「…誰も弱い者たちの友情を勝ち取ろうとはしない、なぜなら誰も彼らを必要としていないからだ。もし我々が、〔ポーランドを三分する〕国境線にもかかわらず、緊密な民族的統一をもって強者となるなら、…日々の活動によって、…〔統一された〕ポーランドを建設するなら、そのとき敵はおのずと、我々に対し、より配慮することになるだろう。そうなれば、ロシアは、我々の歓心を得るために努力さえしなくてはならないかもしれない。」

Dmowski, “Nasze stanowisko wobec Niemiec i Rosji (lipiec 1903 r.)”

- ・・・むしろ脅威として広く認識されているロシアのほうが、対応が易しい、と説明。
- <理由>・極東での緊張の高まり；ロシアは日本との戦争に急速に向かっている、と認識。(1903年1月)
- ・「プロイセンにとって…目下最重要の課題は、…ポーゼンとオストプロイセンをドイツ化することにある。」 [Dmowski, “Nasze stanowisko.” s. 158.]
- ；ポーランドにとって脅威なのは、遠くに気を取られているロシア帝国ではなく、むしろドイツだと強調。

*ポーゼンにおいては、1901年、ポーランド人生徒による大規模な学校ストライキが開始されていた。また、反ポーランド主義的な「ハカティスト」を中心に、ポーランド人の土地取得に対抗することを目的とした、ドイツ人による東方植民活動が行われていた。

『ドイツ、ロシアそしてポーランド問題』(1908年)

<ドイツの脅威——影響圏の政治>

「東ヨーロッパの状況 ドイツとロシア」；1907年8月31日、英露協商が成立した直後の時期に執筆。

- ・英露協商；イラン、アフガニスタン、チベットでの両国の勢力範囲に関する合意が成立。
+露仏同盟(1893年)、英仏協商(1904年)

～英仏露の三国協商が成立、ドイツに対抗する構図。

既に、日露協商(1907年6月)により、日英対露仏の対立は解消。そのため、極東での紛争に区切りをつけた露が英仏と協力して独を取り囲む、という構図に。

(ドモフスキ) 国家間の軍事的権力関係とは別の次元から、「影響力 *wplywy*」という基準を用いて、東ヨーロッパの状況を提示。

日露戦争後のロシアの弱体化に対しての、ドイツの反応を予想、
(ロシアが弱まった状況について、ドイツが優位に立とうとしないはずがない)。

- *しかし、その場合想定されているのは、ドイツによる武力攻撃ではなく、
「ドイツには〔武力攻撃とは〕別の方途があり、その手段の方が、ずっと多くの利益をドイツに約束してくれる。このやり方は決して新しいものではないが、ロシアの弱体化に際して、新しく魅力的な展望をひらいている。それはつまり、一方ではロシアの対外的な影響力とロシア国外にある利益圏を奪い、他方では、ロシア自体における影響力を強化し、ある一定の〔ロシアの利益〕圏内で影響

力強化を実行すること、である。」[Dmowski, *Niemcy* s. 129-130.]

・・・武力攻撃によるロシア領土の篡奪よりも、ドイツが望むのは、ロシアの「利益圏」つまりロシアに入り込み、そこで勢力を拡大すること。

ドイツに隣接するロシア領土であるロシア領ポーランドは、併合してしまえばドイツにとって問題の種となるだけで、支配するに魅力的な地域ではない。行政機構によって直接に統治しても、問題が多発するだけ。

むしろ、経済的な利益拡張において、いわば「非公式の帝国」としてドイツは優越していくであろう、という展望を提示。

ドイツは既に、日露戦争後のロシアを恐れなくてもよくなっている。ヨーロッパの南東部（バルカン半島）の「静かで平和的な征服」（武力による侵攻ではなく、経済活動による掌握）へ。

——ドモフスキは、軍事力もさることながら、経済帝國的な拡張が、ドイツのもたらす危険の重要な特徴であると論じた。

再び、共和国という枠組みの破壊——ドイツに立ち向かう領域の設定

十一月蜂起・大亡命世代以降、ポーランド独立運動が最終目標としてきたのは基本的には1772年国境での国家再建。

←ドモフスキはこの「悲願」を破棄し、ポーランド領土を大きく西へずらす構想を示す。

*ポプワフスキ (Jan Popławski, 1854-1908) の「ピアスト理念」が影響。

最終的には、第一次大戦期に以下の形で確定。

「将来の国家の領土定義は、精確な歴史的根拠にも、純粹に言語上の根拠にも、基づき得ない。1772年の歴史的ポーランドの国境に、ポーランドを再建するのは、今日では不可能であり、〔歴史的領域に再建されたポーランド国家は〕強力な国家になりえない。ポーランドの力の基礎となるのは、住民の大部分がポーランド語を話し、ポーランド民族であると自覚し、ポーランド問題に関係している地域である。

この地域は、1772年のポーランド国境内に収まるものではない。ドイツやオーストリアにも、ポーランド領土は存在しているが、それらは分割時にポーランド領土だったわけではない。しかし、そこに住む人々の大半はポーランド語を話し、思考や感情の上でポーランド人である。具体的には、上シロンスクや東プロシア南部地帯がドイツ領に、またシロンスクの一部(チェシン)がオーストリア領になっている。ポーランド国家にとって、これらの領土の保有は、非常に重大な問題である。

なぜなら、

- 1) 地理-政治的観点からすれば、より正常な国境をポーランド国家に与えることになり、
- 2) 経済的観点からすれば、豊富な鉱物層・石炭（ドイツに奪われたが、ポーランドが奪回すれば、両民族の相対的経済勢力〔のバランスに〕重大な変化をもたらす）を保有することになる。
- 3) 政治的観点からすれば、これらの領土の住民は、高い文化を持ち、自己の国民性を自覚しており、総体としてのポーランド国民を著しく強化する。従ってドイツの下からのポーランドの独立回復は、脱国民化の危険からポーランドを救う。そして、ドイツ国民がポーランドを吸収することで強化されるのを許容しない。」

(1917年3月末、ドモフスキからバルフォア宛の覚書)

[Eberhardt, 2004]

・・・1772年の歴史的ポーランドの国境にポーランドを再建するのは現状では不可能。ロシアと広大な領域を争う「共和国」の領域に再建されたポーランド国家は強力な国家になりえない。

～豊富な鉱物資源とポーランド人住民を含むドイツ領への西進を訴える一方、東部領域の縮小が必要。

おわりに